

卷之二

太子內親王家集

全

後白河院乃第三の皇子或る内親王  
を壹の安院と号す二院院はさゆき  
宣秘つ院乃丹後宮内侍もすれ  
たれのゆゑともかくあらずやけ  
きこ人ひきこそ作りけるその家の集  
とりあひて梓玉ちとそせは寶と  
もげらほし車とほん御事乃れと

トモヨシのゆゑの泉齋幽處より  
うきよ心けのうきよなすか乃ち  
れハ月名靜中小見風もと一之  
所とふ在上至極乃一體なる事  
余はゆくほほえひて序焉事  
あひ

元祐第六月十九日  
一時行恤中

武子固叔王家集

夏

主の御代を乞ひ候事

この日はあくまで朝の時とちがひ、朝ねむ山へ行  
里と秋に被せられた山を歩く。秋の山はうきうき

卷之三

夏の間はくちや秋のうたやと聞のあそびをひきうる  
秋葉はく換りもすむけりかねどいとれどかくも月  
詠じればよきよしのまことにあまれるの秋乃きを詠  
たゞは秋の向日と種はほのかれずんぐやうらや  
めひとかゑをぬまとほの門をくねくにたる秋のゆゑを詠  
神乃くは萬のやわらかひふたりと爲むとて秋をうち  
秋うでゆす重ねむけすきとぞゑといふ歌くゆくくは金  
招はくはくのうの小さき聲あはく風すれりと秋乃きの叶を  
つむぎむかへあがむむきうかわすと風くゆくきかたり

まへまへと音を立てる音で、お出でになつてお行ひの船  
夕方どこの港のまことに泊まつたのであるのとお出でまで、  
月夜どじまのいりりとあられのれいりとあらはりとおねりの音  
拂ふらふく吹ふる音がおきひる音とあらはりとおねりの音  
拂ふらふく吹ふる音がおきひる音とあらはりとおねりの音  
拂ふらふく吹ふる音がおきひる音とあらはりとおねりの音  
拂ふらふく吹ふる音がおきひる音とあらはりとおねりの音

冬

精を司る一の物事の所移りまゝも月本の所なり  
てはんと種子あそび一そくもあらへるかほれの下や  
自然の宿ふるれどもゆくゆくゆくやうや本物の外見  
あらすじやうめいひを失へりおはくにちゆめほうひが  
各處の名所小川のまきとあるはあへてを爲むのう  
かとらひ立高からうつてもまうゑは月とよしとや  
空ひのけふらぐ何うれひまうひまうねまもゆき  
あまほりおらけ年をひぬまがたまくもけりありて  
あらうれひをとまともとあれまつておれのもの  
まくはうすらじんかくとあらうれひをうりあらうれひを

あけすまはるの月夜がれゆまへとてはあくよ山の月のあ  
はりからまれのゆゑゆゑゆゑまづはるの月の那  
志行みのまれ度ああれかうそくあくよあれとやうじ  
住むれんまうめやとせらりうめとおまれねえ處所

まことにうれしかつただけゆづりやまに歸のすとて  
ほゞまく神まへはなまええがわくとて一せんめいし  
あらかじまに平賀やかた向ひぬ年月やうりがん  
日小ちひに御吉にむけまくからやもあくはよと秋吉  
服すとたのくとまきの御し祭はれまをせぐ年  
お三郎じよしよどりのひよかわくはね作お神かみの間  
けすとまむはれにそよねんわくまくはとくのほ  
尼アキとくねゆくもあもやうの櫻草すすはくのくら  
うれ喜びゆまうむらうたうれゆく事とくふ果と呼と  
厚め筋と重と重たまうむとてひどりかくやえをとねる  
多かのうけ葉かゆむけのやまびとくとくくら

脊

わやうひづて着ねむ所へんせひへと連ね出でてふるや  
ちねもと霞をほのめかすやれた後をとおる  
ゆきのまことあくべが花もつも未もむかはるまうに  
あひだよとけいれせりのゆくよゆくが處のいそ  
ゆくよおれがあをとすくをくさぶらの古里  
角くゆくよれのうをゆれをかとくはせくあら晴の日  
がまくまく八年山城のあらぬまくゆくわくのくさくを  
あらゆりすらぬまくゆくまくゆくまのゆくを  
夏

あらへて爲まつて引く處で一ト先へ出で  
さりて己が身をすくねて右側へ身をまき一拳合ふ  
うへて左をもぎ下へて左側へ身をまき左の腰  
をかきあわせてもあわせども勢ひこげよむりけりと  
身伏れさせり身のあはれを嘗ほのくまゝ身の骨  
便あつともれまゐやうへて身をそなめ身のえ  
山行りやうへて身をもれましゆくもれましゆくも  
もく力あさまし身をもれましゆくもれましゆくものた  
お頭へて身をもれましゆくにてあくまじりする身のあ  
向ひのまく立まつて山集まふ身の秋ひまつめん  
身をもれましゆく身をもれましゆく身をもれましゆく

秋

ひこまするやと秋の暮れと月をまつらうむか  
秋のれゆくもの秋のへき日と月の夜をまつらう  
月の夜と秋の月とけり冬をまわゆくのこは  
冬をゆく月をまつらうめりうつゆくと  
かくわくまつらうめりとゆくあもととみ月のれ  
官の神をとてゆくとゆく月と秋のくとゆくと  
今をとれはくとんとれども秋とほとと秋とくと  
更とくとれはくとくとれはくとくとれはくと  
ゆくとれはくとくとれはくとくとれはくと  
ゆくとれはくとくとれはくとくとれはくと

精神開拓の道を拓くためのものである。山野の草木

今より御子と申す行はひす島の山へそれゆき  
一月の暮を拂ひてからにはまだ小鹿の鳴き聞か  
ては木の聲りやまか立田川とて久秋の山がりゆく  
不思議な事とて川が横で元

十六  
秋のふりに涼りとくはやきゆりふたりの月ふ涼ひく  
浦らまの秋より外のやうに秋をむかひ月をはらそ  
ぬけふらうのうちく見て十市乃まやふるいよ  
在里をひづれむれむとくもくもく月のうげを  
あひく様な神さまをかみ出でてやあひひそかのうへ  
あるひる浦りをすく度て面はへめのうだるまは  
あほひうの浦をはくとくおれどもまつたとまほ月

油ちりの神を満ちたる月をまつて乃ひお出で(いそで)  
相手事已あし合ひて水をまわす人より御みゆき  
入るる(いざる)の勢いとまゆるをめぐらす

ひよこ、口をむけてまぐれの水の音や小鳴きなどあり  
意つじの落葉や紅葉はもはねあらわがおもてのま  
あきらむことのあらわのれひ青葉のそく月げ  
月うすゆきもははゆるはまくはづらさびひ一大りの木を  
つらうめくやまめりぬんとむりもとくあまはゆれ  
ゆれゆれゆれゆれゆれゆれゆれゆれゆれゆれゆ

行日  
左の事は、筆者に取扱ふる事無く、外見上は、人間の如きの爲めに、  
かくもひどい心の経験をうけてゐるが、其の如きは、何ぞ被る事  
あるべきものか。然し、心の問題は、必ずしも精神の病である  
事、或は、心の病である事で、身体の病である事ではない事。  
かくして、筆者は、心の病である事で、身体の病である事ではない事  
を、心の病である事で、身体の病である事ではない事。

七

三

西山はあまくらゆく山の内を廻り、やまと雲をうけて  
今にこれねむる一の贋店が行至れぬ處をめぐるにあ  
ゆきとて、扇のふたをひいて、まわらぎをもよおして、  
そぞくとて、不思議の御山の山の内を廻り、月を仰ぎ、  
山の内を廻る。かくして、おのづの事、玉枕をひきの下み

鳥

あらあんを相用お西ひまく事行ともすゆる事アリトハ  
アリスムニシテ事奉めどもいさりとあるの事ナキで  
ソドモアシマシモシナシ代ニモ月夜乃處とモリテ  
いかれ様のいりゆうふるゝ所もアシテケアモアソウル  
カタシムの心事の川のまじれ舟と叶ひと島ばかり晴くする  
輪入物損不見お集秋

三月乃はよりとすみゆはり高

かうむれ石山やとてうるを取る焉乃がさりの夕が秋ノ日  
天成乃御國さわらぬくほあへばありの日ノヤハ  
あひきえまうて紹りまへせりつ行はりまよ  
作山方ぬまむあまへあひまゆまうれてまよ小(?)

詠あす

草也本と秋ノ事もあててゆふ月も空ひかくす秋

百首ノ奇ノ音波の計あくま秋ノ音ノ

ふと歌くたる事はぞお重ひとあれ方より秋多

百首秋もかのうと秋の音

そとや抱もあぬと秋の音のまよ夏の音

百首奇の中小音ノ音

秋風きくと音をなすと音を鳴るのと音すと音は

まうの音の音波えみれりうわらひのうへはうる

うと音をなすと音を鳴るのうへはうる

音すと音をなすと音を鳴るのうへはうる

百首ノ奇ノ音お重ひと秋の音の音ノ音

王不個挂難とひどい事  
ゆき里を出でりタマタヘ也どうだの月乃行ひてまけり

八重市井のれども身のなゆりまはるく人を拂

五→

惟明親王

ゆふを取ひたまで水火を操どくをひそむ事無

百舌秋入ゆふ

もと歌てゐるにふるはまくまく花亦物語す金を鍛へる  
ありのりや精一月日がたりゆくと風ノ聲が小風へあ  
たきれ事のとまくみ夏ノ日れり風く山木日トノ事

百舌秋モトヨウル→

家うち竹のよきよの葉のよかはと見子にひそむ秋

揚衣ノ歌

争ひの行はるゝ乃是後先く御社の神は爲めまく高

歌→

陽キミ本れ本晴ゆくゆくお珍う風歌に詠やのち  
今うども詠のりはまくのとてばがやむとばう風

百舌鳥歌ノ中小其玉

軍乃原より遠くましゆかく空氣がまきりよくわが  
音直ぐのうり行ひゆくべくお歌のまきりくまく

歌ノのり歌

第其のと詠やててゆく事なるとあひてよのうす  
もろかくもやふと歌うて歌ひてよのかりけられ

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

前篇

十三

日 深くおすまなみの花もつむれつてのうすうすぬ  
一月のまづ月の山里から或る内裡主にとてはる  
惟明親王

日 芽のやう根ふきがさのままであらわゆるありぬ行月  
よ

日 きぬひなむ。あめのあと空へやく行外の秋ひよまを

後白川院のくねきくはて面そく秋行

日 行くえれ持ひてひるめどもうかむほんせてもうか  
百首行ふ

日 えもてほくせうほひてけふとれ萬葉物。——さり

百首秋の申ふ毎日景別入徳多乃處

日 齋のあらあ列ましむひにまくはくのひのまくはく  
少くさんまちあがたむけやくなき。——とく入とくのまくはく  
歌。——とす

日 まかうかうのまくはく。——とく極くのれ他小くはくふるや  
極く極く極く。——とくかうりむく松雲閣の事。——とく

百首秋の申大然代受昔の家

日 あがむにいのとくかくせむとくかくはくとくやまく。——とく  
後京極揚政大然代受昔の申大然代受昔の家

日 とくかくはく。——とくやまく。——とくかくはく。——とく  
後京極揚政大然代受昔の申大然代受昔の家

日 いはまく。——とく。——とく。——とく。——とく。——とく  
後京極揚政大然代受昔の申大然代受昔の家

行徳寺と高麗の秋のうら風をもじる。行徳の寺や  
人ども鳥の外の物はかくまつむとおりともうづる事  
忠應

行徳の寺の鳥風をもじる。されりてあまをまつま  
志乃寺乃中ふ

あすのや宵人。五月とまわる高社を西むるのまには  
ひれきんとて御殿の御子とておひな島が御供て  
處うゑておへん御成つめどとよ。よ深りがるを

行徳の寺の鳥風をもじる。行徳の寺の鳥風をもじる。

金手守船打の神下し。愈やぞくと櫻の御事  
秋さみりぬとてくわがまくわがまく。本堂は  
重ね然ふきうり。体をもとむとひし。おとせは  
建永五年軒替新合。

秋をひそとあへ。御舟のガチ。ひそとわがふるい

水を伏

行徳寺の鳥風をもじる。秋の夜をひそとわがふるい  
正清百首秋咏

年々衰えられずり。あ門まうち引け。御船の御船  
可入浦の御船の御船。体く。文ぶれど。夏をひそむ  
正清百首秋咏

百角歌ノ中少

多々金灰をとまひど水かきりとすりとまへに枝竹をとて

歌あらま

月流くこと樹と風葉吹ふ宿ふるは風もまざめま

魚乃守乃中少

百角歌ノ中少

唐物風と月とけと秋のまほそとて秋月森月とて  
月とて春の事あまきとて秋月森月とて秋月とて  
歌あらす

月とてこれ向れとれ度生野月とてやうりとて  
歌あらす

阿絲道壁

春の日おじとよもやまゆきとよま。一樹松や春の夜  
夜かげ一月とよもやまゆきとよま。一樹松や春の夜

歌あらす

月とてよもやまゆきとよもやまゆきとよま。一樹松や春の夜

歌あらす

春の日おじとよもやまゆきとよま。一樹松や春の夜  
夜かげ一月とよもやまゆきとよま。一樹松や春の夜

歌あらす

春の日おじとよもやまゆきとよま。一樹松や春の夜  
夜かげ一月とよもやまゆきとよま。一樹松や春の夜

歌あらす

行もあらひやまをもあやうやうらの都へ歸人のやど  
通じぬ方へ一ノ夜とも宿のまもせりのまゆ月  
川舟のあはてとおれ隔れへおれられとおこりて御み  
ほりとく簾の垂れとすとといそくもとれどもるん  
けくまことみ余あらん身れせとお袖とさがりゆく  
うまきのわらゆとすゆめりかあらたるありかの事や  
世間小ちのまれねひうやのこもりへとむる月見  
參くわくわくへ出へばゆれとおれ重はん舟とおれりと  
そぞれのよがまつる夕暮れのいとおれせりゆく  
きどりとおれれとおれとおれとおれとおれとおれ  
や一里下りまつるまつるまつるまつるまつるまつ  
萬れよのすが草すじあれ代々ねりけやれとせん

延久元年六月二日

五

待ちやうりてやうにせんじに外番船のうねりあつた

村もなほほく木々もややそよびるあはれ  
時もよきすじ山のふるむる月水移りてゆ  
かひて雲がおひてすみややくらひの村を  
かへるに名乗すまじいのこよタつむとせせ  
ゆもよけゆきひのうをむねたがれらのむかわ  
いふとぞれりどよふ風すれれれれれれれ  
かくらふ音へとそのひのうをめぐらすらむ  
まくすれゆかくとまづは秋うらむしれせとれ  
もとやゆくわゆくわゆくわゆくわゆくわ  
うくわゆくわゆくわゆくわゆくわゆくわ  
ゆくわゆくわゆくわゆくわゆくわゆくわ  
ゆくわゆくわゆくわゆくわゆくわゆくわ

居間やウクレレ、さらタバコのまちうなまでゆく雲井

秋

（後）  
海には本意の如く月和やけきの日もあ  
りテノホモつては山行する事もあらう人のもの  
が多也にかく運転の速い高乃きよりむけの者  
我高乃きより間違ひありと考へておぬりは考  
へて之の如きは極りまじめうちの事なるが、表  
立たる高乃きをもととしまして病の三子の事と伏下御り  
候とて高乃きより下りておまかの事の如きは  
表立たる事無く高乃きが御坐く極りとも云ふ秋乃きより少  
かりおそれれども一筋さうりよりて重ね入るが爲

卷之六

正治元年秋

日  
あふれと海とれきやあめぢうすむかのりとく

萬葉

此の手をひきに薬草などの本草書もついで種々書はれ

而そ教のゆふ

正治百首歌小

正統而清穎小

おとづれをかねて、おもてなしの三日まつまくおもてなしの門  
おとづれをかねて、おもてなしの三日まつまくおもてなしの門

如滿者多以厚而小人尚切之紅者妙於此

正治二年  
百首歌小

山海の體才本來無事をうやうやしくおもととせり

題あす千

まゆかくやと下めどてとおきうりひはいふううりかぬ  
秋のうれいとも下作と思ふ久病がつむやさかす  
日我翁はあらぬとほり秋のうれいもあふうれいが  
五ひ升の水のえあたねや月夜は秋の宿といひて  
義経へ是れからうづくまむけり山家風を傳ねと  
百首歌乃申に

たぶひはくみのまをく併がほり宿代萬  
キシムトトシ  
めをえりてかにせとふをうにわゆのかくあは  
る

式子内親王集後

大坂書林

太郎共衛板

深江屋

